

現代社会における人間観の探究

——高齢者に関する人間観の一考察——

坂 本 雅 俊

第1章 高齢者に関する人間観とその形成

はじめに

高齢者に関する人間観の基礎となるものについて、高齢者に関する人間観の要素、個人、家族、地域、国家、そして国際化におけるそれぞれから整理していく。また関連させて、歴史的経過、社会、文化、経済、環境や、差別、階層、人権、教育の整理も必要であろう。

社会的文化的存在について、個人と家族と地域について、歴史的経過について、それぞれ人権と差別に触れながらみてゆくことで、現代社会における高齢者に関する人間観に迫りたい。

1. 社会的文化的存在としての高齢者

人間観に触れていくには、人間の抱く価値観とは無縁ではない。単に「ひとをみる知的行為」という意味に加えて、そこには行動に結びつくきっかけとなるもの、行動判断の規準となる価値が込められていると考える。これに触れて、たとえば、「文化的・社会的存在としての人間をみるとき、効用性の優位と人工的生態系の優位の二つが支配的となる」¹⁾ という価値の分類ができる。「効用性の優位とは、人間の社会への貢献度として、財産や名誉や社会的地位などではかられること」²⁾、そして「人工生態系の優位とは自然を改造し、改造した自然を科学勝利、人間の勝利とみることである。」³⁾ と定義されるものである。

1) 安藤順一編『21世紀・高齢者福祉の選択』中央法規出版、1996年、46頁。

2) 安藤順一編『前掲書』46頁。

3) 安藤順一編『前掲書』47頁。

この視点で、高齢者に関する人間観についてみると、高齢者層は財産や名誉によって分断され、さらに男女、高齢者間の年齢差、社会的立場といった環境によって、現在保持している優位性に固執傾向となるか、もしくはあきらめからの失望傾向になるかというように分類でき、それぞれの立場から人間観をつくることとなる。

一方、自然を改造し人間の勝利とする優位の支配は、人類と自然の2つの分類からなる。人間が全ての中心で、自然は人間のためにあるという利己的な発想に基づく人間観をもつこととなる。人間を、他のなにものにも勝って重い価値があるとする人間観である。そして、時には、人間同士の支え合いのみで生存しているという錯覚を生んでしまう。

高齢者の「介護」に関連させて見ると、高齢者介護は、人間同士の支え合いで管理できる、解決できるはずだ、との人間観と通じる。自然のなかで、競争と協力によってはじめて育ってくる「生きる力」に期待する人間観ではない。したがって、ここで人間観は、高齢者と論議をつくし、妥協点を見つけ、そうして支えあうのではなく、科学で管理することで、病気や老化に伴う「介護の問題」に対して勝利しようとするものである。

まとめると、ある対象への人間観を形づくるためには、関連して差し迫った人間観を問われるような、判断せざるをえない立場におかれることが必要と言えよう。高齢者に関する人間観は高齢になるほど明確な価値意識となるとの仮説が成り立つ。そこで、「老化の体験」は、我々に確実に訪れる時間的経過に伴う発展的課題として捉えておきたい。また、人間観がつくられるには、生涯収入や役職、地位などに関連して、男女の差と違い、障害者と健常者との差と違いの影響のあることを踏まえておかななくてはならない。

2. 個人と家族と地域における高齢者

高齢者に関する人間観を抱く個人についてみる。それは、ひろくみていくと家族との暮らしや、地域における暮らしと連続性があるといえよう。しかし、個人ひとり一人に焦点をあてると、各々の抱く人間観は多様である。この個々の違いを、個人・家族・地域という連続性でつなげて考えていくことが、高齢者に関する人間観の、同一性と差異性を示すことにつながる。個人は家族とともに暮らす、家族は他の家族との互助生活から地域をつくり暮らす、という文化的なつながりをもつ。そして、各個人の抱く人間観の微妙な差違がそれぞれ個々に刺激し合うからこそ、地域は存在しつづけているともいえる。

すなわち、人間観の多様性は、地域をつくり再生しつづけるエネルギーの源になっていると考えられるのである。もし、各個人の人間観が、ほぼ同質に類似するとどうなるだろうか。地域における問題は、個人から見えなくなる。そして問題はないものとみなされるか、あるいは問題があったとしても類似という合意のもとに放棄されるものと思われる。

しかし、現実にはそうではない。個々人の人間観は多様でありながら、社会的文化的、そして個人・家族・地域・国家・民族といったラインで整理することで、同一性と差異性をともに兼ね備えている。

では、個人の人間観の差異はどうしたところから生まれるのであろうか。これについて個人の心理的な面からみると「人間の気質は幼少期から生活してきた環境、経験によってつくりあげられ、素質的な知能によって受け入れ方が違うことにも関係し、健康上の問題も影響して、総合的な関係が成長期後の人柄をつくる、(中略)、病的な状態になっていなくても、機能的衰えがどこかに生じることで老人気質が影をみせてくる」⁴⁾と指摘される。そこで、高齢期における人間観は次のように分けられる。同一性としては、老人気質のことを意味している。そして個人の人間観の差異性は、幼少期からの環境、経験、生得的な知能、健康上の問題をなどから生じてくる。そしてさらに人間観は、この人間の気質に加えて、先ほどの、文化の影響と、文明の優位性を背景とした社会背景の影響を受けている。

ここで仮に「文化は宗教や言語、習俗や迷信など、民族単位や国家単位で大切にされ独自に継承されているもの、文明は民族や国家によって選択もされるが、通常は人間に共通して便利なもの、普遍的価値のあるもの」⁵⁾と整理すると、個人・家族・そして地域における高齢者に関する人間観は、文化的影响から虐待思考や敬老思考となる可能性を秘めており、文明的影响では、普遍的価値があるがゆえに、人間観に一定の固定化・硬直化した同一性の視点を与える。この同一性とは、高齢者の人権を普遍的価値とする。国際的に徹底して追求されることで人権侵害に苦悩する個人高齢者の減少を招く。また一方では、高齢者に関する固定的な人間観が国際的に定着する。そして高齢者に関する人間観は、的確に、普遍的にとらえられるがゆえに柔軟性を欠いたものとなる。個々人の生き方や考え方の違いをみるよりも、「高齢者の特性」としてひとまとめにみるという合理性が支持される。こうしたことから、人間よりも社会システムに依存する傾向を招くと考えられる。

4) 穂永豊著『老人の心理』中央法規出版、1978年、2頁。

5) 福川伸次著「メディア時評」読売新聞、1997年3月30日、13頁。

老親の面倒は社会のシステムでみるべき、また裏返しに、個人の幸福追及を合理的に求めるのがよい、といった人間観を妥当な社会規範とする可能性を秘めている。

3. 歴史的存在としての高齢者

次に高齢者に関する人間観について、歴史的なことに触れて基礎的検討としたい。

歴史的存在として的高齢者について、「高齢者に関する人間観の基礎的検討—社会福祉実践との関連における一考察—」⁶⁾ からまとめると、生活文化と老年観の関連について見た場合、人間の尊厳に裏付けられた人間観の構築こそが、日本の現代社会に問われてくるのではないかということであった。そして、人間観が人と人との互いの考え・心情の相互作用であり、そこから生まれる熟考し行動する力であるとの理解についての検討の必要性を述べた。

老年観についてみると、特に西欧における古代の観念論的老年観から科学的な老年観への変化は、老年が神秘的なベールにつつまれた、畏敬をもつ存在としてではなく、心身の老化として客観視される経験を経てきた。このことは、文明の発展と並行するように、時には、老人への尊敬の念を無意味なものと位置づける文化をもつ可能性を意味していた。客観的視点をもつに至った近代社会において、高齢者に関する人間観は、その社会の文化の影響をうけて、敬老傾向や虐待傾向になるなどさまざまであった。ここで、改めて加えて検討したい。文明の客観性を踏まえたところの文化の影響という意味は、あるべき「高齢者に関する人間観」と関係があると思われる。たとえば、文明は、合理的である限り普遍性を持ち、異なる文明の社会にも受け入れられるといった考え方についてみると肯定できよう。神秘性を帯びてみられてきた高齢期に対する長い歴史にピリオドを打ち、高齢期は、老化という生物現象を通してとらえられることで、本音と建前、軽蔑と尊敬、じゃま者と敬老といった矛盾する見方をもって一層ははっきりと使い分けられるようになる。これは高齢者に関する差別観の一つと考えられる。高齢者に関する人間観は文化そのものに影響されるというよりも、これまでの歴史の経過から類推して、文明により今後も客観視されつづける。そして、個人や家族や地域における社会生活上で文化的に消化されつづけるという図式がみえてくる。呪術的行為の否定、習俗的行為への疑問視、また、階級における人間の既得権に対する疑問視など、知識や情報不足を原因として、それまで抱かれてきた近代以前の人間観そのものへの疑問は増大傾向にある。これは、神格化された人間観に

6) 拙論『佛教大学総合研究所紀要』第4号、1997年。

対して、客観視する芽生えが生まれたが、同時に、人間以外の生物や自然環境に対する神格化された畏敬や尊重の観念も客観視されたことを意味している。

一方、「高齢者福祉の推移」として、社会福祉の利用者像の変遷から、高齢者観が分類できる。例えば、福祉サービスを必要とする高齢者に対するイメージと社会の反応は、①社会の負担、拒否反応、②同情の対象、隔離、③精神的欠陥、部分的統合、④社会的障害、完全統合といった推移が指摘される⁷⁾。福祉サービスを必要とする高齢者に対するイメージは、ノーマライゼーションの理念の実現に向けて、独自の推移をたどっている。福祉の対象としてみた高齢者観は、拒否や収容といった像が、今も決してなくなっていない。歴史的にみた老年観と、福祉の利用者像とは、分けて記すことはできるが、統合して記すことはなかなか困難である。今後の課題としてつなげたい。

4. 今後の課題

「人間観の客観化」は進行中であり、人権という人間の普遍的価値としての見方が生まれてきた。また、「人間の尊厳」は、畏敬や権威の象徴、あるいは人権の主張などによって獲得するものではなく、人間が存在すること、そのみで共通理解を得られるべき人間観である。

このように仮定すると、高齢者に関する人間観には、どういった影響があるのだろうか。たとえば、高齢期をマイナスに捉える、あるいは極端に自殺に及ぶような場合、また、高齢者に対する虐待や虐待の行為などの場合は、高齢者に関する人間観とどういう関連があるのだろうか。

このことについて、たとえば、老いのセルフイメージについての調査などから「老人では自己認識像に存在環境が大きく影響し、意識を規定していると考えられた」⁸⁾との指摘から、高齢者の存在環境が自らの「老いのセルフイメージ」づくりへ強く影響しているようである。現実の生活では、存在環境を細かく分けるとその数は人間の存在数だけあるといえよう。しかし、高齢者に関する人間観は、複雑な人間のこころを対象にしなければ見えてこない。教育を受けたことや、経験したことや、生活環境を通して、人間観はさまざまに規定されるという一面でもある。

そこで本論では、高齢者に関する人間観の探究を深める意味で、現代日本における「介護」を通してみてゆきたい。

7) 浅野仁著『高齢者福祉の実証的研究』川島書店、1992年、192頁。

8) 山崎摩耶著『日本で老いるということ』中央法規出版、1993年、19頁。

介護のシステムを社会政策としてみると、たとえば「公的責任や普遍主義の視点から高齢者をとらえない限り、(中略)、総合的な政策のフレームワークの構築は望めない」⁹⁾と指摘されるように、高齢者介護は公的責任やサービスの普遍性の視点が欠かせないことはいうまでもない。しかし、高齢者に関する人間観は、「政策のフレーム」に納まりすぎると、「政策上の公的責任」が「介護は公的な責任」と直結して受け取られ、そのことはイコール「介護に自分は責任なし」というところまで変化する可能性がある。これに対して「長寿文化論や生命哲学を踏まえた高齢者ケアの社会政策学の構築が必然的に待望されている」¹⁰⁾と提案されるように、文化や哲学を踏まえた政策づくりが望まれるところである。それは、法制度づくりに歩調を合わせて高齢者に関する人間観、いわゆる「あるべき人間観」を踏まえることとも言い換えられよう。

高齢者が福祉サービスを利用する場合において、介護を受ける側がいつも社会のお荷物(じゃま者)¹¹⁾としてみられる人間観がわれわれの文化として再生されないためにも、介護が(上から下へ)与えられるサービスとならないように配慮することは、高齢者に関する人間観への社会的になされなくてはならない課題である。

そして「あるべき人間観」が生活に根付いて構築されるためには、「人間の尊厳」を学んだ介護職の存在が欠かせないものと思われる。介護における社会福祉教育の力に待つべきところが大いに関係している。

高齢者に関する人間観の今後の行方は、福祉関係職が「あるべき人間観」を学習する方法を学びつつ社会へ出て活動することに期待のひとつを寄せたい。それは、高齢者とその家族と一緒にあって悩み、活動することである。日常生活における実践の葛藤を通してこそ、長寿文化や生命哲学を踏まえた「あるべき人間観」が見出だせるものとするからである。

高齢化社会において、高齢者が人間らしく生きるということの基本的要件として、「心身の健康の維持・向上、生きがいを持つ、人格が尊ばれる、人権が重んじられる、自己決定が尊重されること」¹²⁾が指摘されるように、人間らしく、という条件は「人間の尊厳」がキーワードとなると思われる。

人が人を支えるという営みの歴史、親の面倒を家族がみることと、高齢者の世話を社会が行うこととは、単純に同一視してはならない。そのことは、福祉思想教育でも

9) 松原一郎編『高齢者ケアの社会政策学』中央法規出版、1996年、253頁。

10) 松原一郎編『前掲書』253頁。

11) 副田義也「現代のエスプリ」至文堂、1978年、126頁。

12) 今井行夫著『老人ホームの実践的処遇論』中央法規出版、1994年、3-7頁。

取りあげる必要があろう。人間のぬくもりやこころといった世界は、歴史的にも、そして国際的にも共通している文化である。

日本の場合、親の扶養に関しては「明治民法に規定された家父長的な直径家族制度の下では長男子に課せられた義務としてあり…家族内私的扶養の問題に止まり、社会的な問題とはなりえなかった。」¹³⁾ という文明をもつ。現代社会における高齢者に関する人間観について「社会が高齢者の生活支援を行う」ことは、社会システムとしてのものである。これに伴う人が人を支えるという営み、人間のぬくもりやこころといった世界、そうした文化を形成する基盤が欠けているとすると、「扶養は個人の嗜好でよい」と国民から権利として解釈されても仕方がない。

歴史的なこれまでの経過からみて、「高齢者、対、社会」の関係においては、結果として棄老につながるような人間観を育んでしまうような社会政策の関係であってはならない。そのためにも社会福祉関係教育に関わりにおいては、社会政策の策定に合わせて、高齢者と社会の関係について緊張した論議をつくし、その上で、共に暮らせる道を拓くべく、人間観への深い洞察の必要性を添えて国民に示すことの責任がある。

第2章 高齢者に関する人間観の基礎的整理

1. 高齢者の環境

高齢者に関する人間観を探るにあたって、高齢者観の整理を行ってゆきたい。

はじめに、高齢者の生活における現状を少しまとめておきたい。

日本の老年人口割合は14%に達している。昭和30年代頃から高齢化社会になり2000年以降、老年人口割合が一定に推移する高齢社会になると予測されている。ところで、人口高齢化の原因は、「出生率と死亡率」の低下であるが¹⁴⁾、近代化が始まる以前は高出生率と高死亡率の「多産多死の社会」であったといわれている。

大筋には、人間が多く生まれ多く死んでいく社会における人間生活と、その逆では、ライフサイクルに違いが考えられる。単純に考えてみると、多産多死の時代では、その平均寿命が40～50歳サイクルであった。平均寿命を比較すると、大正10～14

13) 同朋大学老人問題研究会編『長寿社会における老人福祉』中央法規出版、1992年、128-129頁。

14) エイジング総合研究センター編、岡崎陽一・山口喜一監修『長寿社会の基礎知識』中央法規出版、1996年、4頁。

年で男42.06歳、女43.20歳、平成7年で男76.36歳、女82.84歳である¹⁵⁾。合計特殊出生率は、昭和24年には4.3であったが、ベビーブームで一時増加したが、減少傾向をつづけている平成7年には1.4ほどとなっている¹⁶⁾。「昭和16～18年には220万人台の出生が続いた。一方当時の年間の死亡者も120万人を超え文字通り「多生多死」の時代であった」¹⁷⁾ことは、出産、子育て、死亡といったサイクルが短く繰り返されることを意味している。ちなみに、乳児死亡率の著しい低下も、明治大正期には、出生児1000に対して死亡が150～160であったのが、平成7年では4.3となっている¹⁸⁾。

こうした現代にいたる人口動態の背景の変化は、高齢や老人という言葉に込められた意味に変化を及ぼしていることはいうまでもない。

高齢者に対して環境の及ぼす関係についてみると、例えば、「自分はいつから老人」
と思うかという意識は、民族や国家によって違いがみられる。これについていくつかの国別の調査がなされている¹⁹⁾。「ドイツ、イギリス、アメリカは「仕事からの引退」を「老後生活」像として考え、韓国、日本は「健康が衰えた後」を「老後生活」と考えるという傾向がみられる。また韓国では「子の結婚や独立」の割合が高く他の国々ではそうでもない。日本では「年金生活者としての生活」の割合が顕著に高く、しかも年を追って比率が高くなっている」²⁰⁾である。ここにも、生活文化の違いから、高齢者の抱く老年期についての考え方の違いが伺われる。どういった生活の文化のなかで思考して暮らすかということは、老人へのイメージ、また高齢者に関する人間観を一面では規定することが伺える。「人間働けなくなったらしまい」とか「妻は老後で夫は余生」というような一般論は、現代社会の人間観の一端を表現した言葉であると思われる。つまり、夫は定年したのちは、人生の役割を終えた余った生だという意味で、妻は老いた後も生涯にわたって家事労働が強いられるという意味などと解釈できる。

わが国でも、子育てを終え、わが子が独立していくころ、暫くして親は死んでいくというサイクルが平均的という時代があった。70歳、77歳、88歳、99歳などを古希、喜寿、米寿、白寿などの年齢の節目は、まれなこと、めでたいこととして受け取ろうとする文化的な習俗を示すものであり、表面的であるにしろそれが社会常識とされ、

15) 厚生省「国民の福祉の動向」1996年、表16参照、22頁。

16) 厚生省「前掲書」図8、9参照、16頁。

17) 厚生省「前掲書」16頁。

18) 厚生省「前掲書」142頁。

19) 総務庁長官官房老人対策室「老人の生活と意識 第3回国際比較調査結果報告書」1992年195～196頁。

20) 総務庁長官官房老人対策室「前掲書」195頁。

高齢者に関する人間観を象徴する表現であった。

国民のだれもが等しく長生きできる現代、高齢者に関する人間観は、いくつかに分類してとらえることができる。「長寿」の意味は、希望とともに失望も同時に、「現代社会における人間観」へもたらしている。具体的には、高齢者においても、55.3%(平成6年)が同居している。同居のなかみは、一家に高齢者が4人も同居する場合もある。長寿は、社会表面的にもめでたいという意味で表現されながらも、「どうひしめき合って暮らすか」という試練の意味をもっている。年金世代といわれる60代以降は、老化に伴う体力的変化を抱えながらも、平均寿命の80代までの20~30年間でどのように「生きがい」を保持して生活するのか、という課題を伴う。単に、高齢期は、主体的に心身共に充実して幸福を追及する生活をすればよい、と言葉で表現するのは可能である。しかし、現実の生活は、なかなかそう単純に計算通りに割り切れない。

高齢者が「自分は人間らしく生きられない」²¹⁾と感じた時点で高齢化社会は「人間の尊厳が守りきれない社会」となるといえよう。

例えば、高齢者の自殺についてみると、「日本の高齢者の自殺率はつねに世界でも上位を示す。とりわけ女子老人の自殺率が高い。一般に、老人の自殺はうつ病や老人性精神障害など、生物学的要因が大きな影響を与えると考えられてきた。しかし、わが国において戦後の高い老人の自殺率が次第に減少してきたこと、動乱後のチェコやユーゴにおいて老人の自殺が激増したこと、社会的に不安定な台湾で老人の自殺者が増加したことなどを考え合わせると、老人の自殺では、(生物学的要因は当然重視するとしても)社会的・環境的要因が重大な影響を与えていることが想像される。(中略)日本・ドイツ・イタリア・オーストリア・スリランカなどでは老人のなかでも高齢になるほど自殺率が高くなる。また、北欧・アメリカ・イギリスでは65歳をピークに老人の自殺は減少する。これについてC・S・クロイトは、個人の自主性が確立されていない社会では、老人の家庭依存度が高いため、高齢になって生物的孤独感が高まると、孤独感がさらに深刻になり、そのうえ、社会的孤独感に耐える訓練もできていないので、自殺する者が多くなる」²²⁾と説明している。

すなわち生活環境の影響は、その文化の違いによって受けとめ方が違う。高齢者が人間らしく生きられない社会は「人間の尊厳が守りきれない社会」といえよう。そしてこのように、社会的環境要因から、高齢者の自殺の増加することが指摘されてい

21) 今井行夫著『前掲書』1-2頁。

22) 大原健士郎編『壮年期・老年期の異常心理』新曜社、1980年、200、201頁。

る。

2. 「高齢者に関する人間観」の整理

ここで、高齢者に関する人間観についていくつかの視点から整理してみたい。これは、生活のなかの多様性の整理である。高齢者に関する人間観のあり方は、その歴史的な時間経過や、国際化と人権の関係問題などとの関係をひろいあげてみる必要がある。

①「普遍的な人間観」と「絶対的な人間観」

「普遍的な人間観」は人権という概念が国際的には正しいと認め合い、どの民族・国家の人間においても必要だし、人間には有用であると認められる。そういう性質をもっている。「絶対的な人間観」は、人間の尊厳という概念で、人として生を受けたことから自然発生的に備わっていると認められる人間観である。前者は、人間観を形成していく外側からの視点、後者は人間存在という内面から発信される人間観の視点であると分けておきたい。後者はつまり、人はうまれながらにして平等であり、人として尊ばれるという意味から定義される人間観である。人が人を見るという「観」ではなく、人の内側から自分の存在について「尊厳をもって観ろ」、という内から発する人間観である。通常、人間観という場合、人をどうみるかという観察を指すことが多いが、人に自分を「尊厳をもった人間」として観ろ、という観られる側から発信する積極的な意味である。

この整理を高齢者に関連させてみると、高齢者自身から発せられる絶対的な人間観は、まさに「人間としての尊厳を貫く」というメッセージを発信しているはずであり、それを受け入れる「受信器」としての人間観をわれわれは持ち合わせているかという疑問がおこる。

一方、普遍的な人間観は、人間社会においては、共通した人間どうしの見方、価値観であると考えられる。さらに加えるならば、普遍的人間観を詳しく分類する場合、高齢者や老人、老年としてひとくくりにするのではなく、男女別、前期・後期高齢者層など、それぞれの環境や立場に分けて考えていく必要がある。

②「個人の責任と観る人間観」と「社会的要因の責任と観る人間観」

過去と現在の違いからみると、例えば人権の主張に関して、主張できる立場の人間に優位性があり、なんらかの要因で自らの人権主張ができない立場の人間の権利は社会表面に出にくかったということがある。歴史の体制をどう位置づけるかによって、人権に対する評価は違ってくる。しかし、歴史小説などにおいても、時の為政者が現

代のヒーロー、ヒロインとして愛好される裏返しには、その他大勢の人権を侵害され続けた人間の存在がみえてきにくい。歴史小説ではなく、客観的大説として、ここでは、認識したい。人間の尊厳をどう保つかという方法について、「個人の責任として観る人間観」から「社会的な要因に責任があると観る人間観」への移行が、国際化の影響により、人権尊重の意味がようやく普及しはじめているところであろう。具体的には、地域内や義務教育機関内で起こった問題、たとえば、昭和10～20年代では、学校の水泳大会で生徒が溺死したような場合や、生徒による、あるいは教員による校内暴力においても、それはその地域内の学校内の問題に届まってしまう傾向があったが、現在では、その原因をひろく社会に問うという姿勢がみられる。現代社会におけるこの考え方は、責任所在を明らかにしようとする意味と、自己の権利主張の意味、そして、人権尊重の意味を問うていく意味ともとらえられる。しかし、自己への人間観を甘く抱き、責任逃れや義務の放棄など、追及されなければ自責の念はないという人間観も生んでいることも見逃せない。

③「知識」と「体験」の人間観

人間観は、現在生きている人間が抱く人間観であるが、人間観をつくる要因は、現在生きている人間を対象として限っている訳ではない。語りべや書物などにより、過去に生きた人間の生きざまから「あるべき人間観」を学ぶことも多い。こうして整理すると、絶対逃れられない「人間観を問われる」ような機会が、人類の長い生活の営みのなかに受け継いでいるはずである。その一つとして、肉親の死をみとる体験などがあげられる。これは自らの体験を通して人間観について考えざるをえない貴重な機会である。

例えば、自宅ではなく病院で死ぬという事実は、高齢者などが自宅で臨終を迎えられないだけでなく、その家族が肉親の死の過程をみとれないことを意味する。死にいく人間を直接処遇する体験ができないのである。これは、人間観を問い詰めるよい機会、すなわち、あるべき人間観を問われるような機会と出会えなくなっているのではないか。

肉親の死にいく過程とのかかわりを通して、自らの人間観に問いかけ、また、問われる。こうした問題への直面、学習の機会を失っているものと考えられる。

この学習の機会を逸することは、死というもの、死後について、などに関した人間観を体得する機会をも逸するのではないか。

従って高齢者に関する人間観の探究は、死後の人間への価値観とも繋がっているとされる。まるで肉親のこころの傷みを癒すプログラムとも思われる初七日、四十九

日法会、盆といった、家族の癒しの適宜の節目行事の形骸化は、高齢に関する人間観の体得を一層貧弱なものとしてしまっている一因と考えられる。

「盆休みイコール海外旅行期間」とマスコミで紹介されるような現代社会では、知識でみたということでは文化の伝承はなされているが、体験として身につく人間観には至らない点が指摘できよう。これは、後に触れる人間観のあるべき姿に影響をもたらすのではと考えるのである。知識としては、高齢者に関する人間の尊厳を掲げた人間観は想像できても、自らの経験して体得した人間観ではない。体験に基づく人間観の減少と、体験しないが知識としてもっている人間観の増加は、死後の自らへ向けた人間観と、生きている自らへ向けた人間観と向きあう機会を減少させている。そしてこのことは、高齢者に関する人間観を体得することの難しさそのものを意味していると思われる。

④地域生活に関する分類

社会福祉における人間観という視点から、地域社会における高齢者という整理をおこなうと次のようである。

地域社会について、奥田道大は、「都市コミュニティの理論として、住民が普遍的価値意識に基づいて行動することによって新しく形成されるもの」と表現している²³⁾。そして、コミュニティの範囲は、行政圏・管轄圏、利用圏、生活圏、活動圏や地域福祉圏などと理解される。地域生活は高齢者の手の届く範囲を指す。「住宅、職場、学校、病院、コンサートホール、美術館、スポーツ施設、自然環境などは地域内でアクセス可能でなくては意味がない」²⁴⁾のである。高齢者に関する人間観は、こうした、人間と人間の距離について、アクセス可能か否かの実際の距離によって一つの整理ができる。それは、自己と他者という関係のもちかた、そうした人間観は地域生活を中心として受け継がれてきたと思われるからである。

高齢者に関する人間観の形成について、人と人の距離の点から整理してみたい。

1) 家族・親戚などの関係からうまれる高齢者に関する人間観は、それが親族であるがゆえに最も注目されてきた点であろう。互いをかばい合い、助け合おうという肉親の情で形成される人間観である。ここでは、家族なるがゆえの激しくダイナミックな人間関係の葛藤がみられる。この葛藤から、親や親戚の高齢者個人に対する人間観が生まれる。それは、より個人に焦点をあてた人間観であり、その個人がたまたま高齢者という属性にあるといった方が適当であるかもしれない。「氏名や人柄なりを熟知

23) 奥田道大著『都市コミュニティの理論』東京大学出版会、1983年。

24) 金森久雄 伊部英男編『高齢化社会の経済学』東京大学出版会、1990年、329頁。

した上での人間観」と「普遍化された老化に伴う心身の変化に対する人間観」を合わせもつこととなる。これに関連したような社会調査においても、この両面のどちらかに偏るような回答となってしまうことがみられる。例えば、「両親と同居するか」の問いに、高齢者は頑固なので同居できるかわからないや、自分の親は理解があるから同居ができるといったような回答である。普遍化された老人観と熟知した個人に対する人間観とが、そのライフサイクルのなかで、また日々のサイクルのなかで拮抗しているものではなかろうか。

2) 次に近隣の高齢者に対する人間観についてみたい。ここでは、近隣のという意味は地域社会におけるという意味としておきたい。高齢者に関する人間観は、地域における高齢者の理解の部分でもある。ここでは、氏名やその個人を知っているという顔見知り的高齢者とそうでない場合も含めて、また、都市と農村部においても地域における高齢者に関する人間観には相違があると思われるが、地域を「福祉先進国においては、ほぼ共通に、所得保障や全国的福祉計画は国が担当し、高度な専門的医療サービスは広域自治体が担当し、日常的福祉サービスは基礎自治体が担当するという役割分担が確立しており、我が国でもようやく福祉先進国と同様な体制が整えられつつある」²⁵⁾として一般化した基礎自治体を構成するコミュニティの範疇としての生活圏・活動圏という意味でみていく²⁶⁾。こうした地域と高齢者の関係は、顔を見知っている高齢者については、家族にみられたような葛藤関係は少ないが、むしろ普遍的な老化に伴う心身の変化を備えた高齢者観の面とさまざまな個性をもった高齢者観の両方を合わせもっている。

そして、名も知らない同地域に居住の高齢者についても同様であるが、この場合は、特に、高齢者や老人としてひとくりに束ねた見方（文化的・普遍的な）の人間観となるものと考えられる。このことは偶然の出会いから形成される人間観としておきたい。

3) では、国家レベルではどうであろうか。生涯出会うことのない同じ国民として存在する高齢者観である。これは、ほぼ、その個人についての情報が皆無なことから、日本人としての文化的な考えをもっているであろうとの予測のつくという意味での高齢者に関する人間観と、普遍的な高齢者に関する人間観の見方の両面で満たされるものと考えられる。

4) そして国際的にはどうであろうか。先進国や途上国、未開の民族のそれぞれの立

25) 阿部志郎他編『地域福祉論・社会福祉士養成講座』中央法規出版、1992年、13頁。

26) 硯川真旬編『新社会福祉方法原論』ミネルヴァ書房、1996年、133-134頁。

場における高齢者に関する人間観は、想像が及ばないのではないか。未知の高齢者に関する人間観である。それは文化的な背景による人間観が未知ということから、普遍的人間観にどのような処遇と考があるのか不明であるからだと思われる。ここで、老化に伴う心身の変化という普遍性は、事実ではあるが、それだけで高齢者に関する人間観として示すことは無理である。人間観は心身の必ず起こる変化（老化）の事実とイコールではない。それを社会的にどう受けとめて、個人がどう観ているのかという理解が必要である。

第3章 あるべき人間観について

人間観と国際化を考える場合、未知なるがゆえの誤解を抱いた人間観がある。例えば、野蛮や上品といった他の国民や民族へのイメージは、生活地域を共にするという経験のないまま、断片的知識だけで想像した産物であることはいうまでもない。しかし、民族間、国家間という絶対的距離、生活圏という範囲はいかんともしがたい。人間観のうち、生活を共同して経験することからしか体得できない人間観がある。

国際化がすすむにつれて、民族や国家の枠を乗り越えた人間観を我々はもち得るのだろうか。国際社会においても、われわれの抱く人間観は、日常生活で出会う人間とその文化によって、規定されることに変わりはないであろう。しかし他の国民や民族との情報交換、旅行などを通して、それら少しの情報から、その範囲内で未知ながらも、何らかの人間観は抱いている。

老化の心身の変化が人間にとって普遍的なことから、他の国家や民族の人々も老化に伴う心身の変化がみられるであろうことは想像できる。しかし、国家や民族のそれぞれの社会における高齢期は、権威に満ちて観られているのか、あるいは象徴的か、失望的か、期待的か、じゃまなかなど、違いがある。

そこで、あるべき「高齢者に関する人間観」の方途を探るにあたって、人間の相互関係についての社会的要因を整理する。

1. 高齢者に関する人間観と介護

現代社会における生活者は、自らの一生の人生設計を、平均寿命の80年程と意識して人生設計の再構築をしている渦中である²⁷⁾。

27) 拙論坂本雅俊『前掲書』213頁。

「長生きはいいが老いぼれたくない」という意味は、高齢者に関する人間観の2つの側面、喜びと悲しみ、明と暗、尊重と差別などを含んでいる。「老いをごまかさなことがすべての出発点であり通路でもある。」また、「実像を実像としてあきらめずに引き受けること、ごまかさずに、高齢化社会を支え、励ます人間的なシステムを開発することが緊急の主題である。」²⁸⁾と今後の老人福祉について語られるように、まさに耳に響きのよい「老人福祉」で高齢者を「扱う」ことは、隠蔽と虚偽に満ちた社会を再生しつづける可能性が大であるといえよう。

あるべき人間観は、この「明・暗」とともに明らかにしつつ、かつ「明」としての人間尊重を照らし出すということである。それは、「人間の尊厳」を肯定する理論的歩みである。それは、差別や偏見、敬老と尊重などの清濁合わせのんだ意見を、徹底的に社会的につきつめること。そして、論議をつくし、互いの譲歩と自己犠牲のうえに、なおかつ社会生活を続ける人間の姿を求めることであると考ええる。

老人福祉法の平成二年の改正公布において、第2条「豊富な知識と経験を有する者として敬愛されるとともに、生きがいを持てる…(新)」と追加している。これは、「あるべき人間観」を社会的に創造していこうとする理念として受け止められる。年長者が年月の経過をもって年下から敬われ、また年下と年長は人間として互いを尊重する。こうした関係がある。年齢を一つのものさしとして年長を敬うという人間観は、高齢者に関する「あるべき人間観」のひとつとして妥当ではないか。

しかし、「介護の社会化」のすすめられる現代社会において、「老後」や「余生」といった意味に表現される高齢期は、年長者として敬われねばならない立場と、介護、医療など社会保障関連サービスの大量消費者としての立場の両面をもっている。前者は「こころの課題」で、後者は「経済の課題」とも分けられよう。例えば、高齢者の面倒は、家族の自分達ではとてもできないから、介護は介護の専門家などがみてくれるべきだという意見が聞かれはじめていることに注目したい。家族の介護は、自給自足から社会政策システムでまかなおうとの施策がすすめられているとの見方もできよう。では、家族はここでは心配はしているが、具体的な介護は政策システムでまかなうという人間観が成り立つのであろうか。そうすると介護の問題は経済問題が中心であるとの考え方が成り立つ。しかし、一方では、老化にともなって高齢者に生ずる家庭内の問題、うつ症候群、活動能力の低下などに対して、家族への行動療法の効果が認められている。家族介護の効果がデータとして評価されている状況もみられ

28) 小倉襄二著『老後社会保障システム論』世界思想者、1986年、226-227頁。

る²⁹⁾。

介護に関連した人間観は、現代社会における「高齢者に関する人間観」の「あるべき人間観」と通じる将来像を描けるのであろうか、事例を通して検討してみたい。

2. 事例でみる、あるべき人間観

高齢化社会を迎えてますます重みを増すのは、「高齢者と若者がどう生きるのか」というテーマであろう。あるべき「高齢者に関する人間観」という内容は、高齢化社会・高齢社会に対していかなる理念を掲げるかという価値意識の啓蒙ともいえる。そして、現代人の思考を予防的・予測的に変化を促す力動性を含んでいる。

夫婦2人暮らしで、妻は脳卒中後遺症の片麻痺があり、夫が介護するということで退院となった。ホームヘルパーと看護婦と近隣のボランティアが一週間の支援態勢を組み支えていった。毎日だれかが訪問する、日に2～3人がほぼ約束した時間にそれぞれ分かれて訪れてくれるのである。そうしたところ夫が入院してしまった。夫に聞くと「あまりにいろいろの人が出入りするので気疲れした、家がくつろぎの場でなくなった。」というのがその訳であった。それ以外にも、妻からは「介護のあれこれについて（夫に対して）あてにならない、頼りない」と言われがっかりしていることもわかった。支援態勢が整うのに比例して、妻が頼りにするのは出入りする専門職の人で、長年信頼しあってきた夫ではなくなっていったように、夫には感じられた。支援サービスの関係者は、この時はじめて支援態勢の万全の働きかけが、この夫婦の信頼感、きずなといったものを支えきれていなかったこと、逆に夫の自信を失わせ、妻の介護職への依存を高める傾向であったこと、などを反省したのであった。

利用者本人と介護職との信頼関係は深めたが、家族間の信頼関係をみまもり支える支援ができなかったということであろう。

さらに考察すると、夫のように自信を失うのではなく、「介護は難しい技術なので専門職でないとできないのではないか、だから自分にはできない」とか、飛躍して「介護は専門職がみてくれるから自分はみなくてもいいんだ」とう考えに至る場合もでてこよう。

あるべき人間観が、今後のコミュニティの成熟には欠かせないと考えられる。コミュニティの成熟に至るには、たとえばこうした、介護における人間観をあるべき人間観へと、どのようにリンクさせるかということが課題となろう。現在の地域における

29) E・M・ピンクストン/N・L・リンクス著『高齢者の在宅ケア』浅野仁、芝野松次郎監訳 ミネルヴァ書房、1992年、17、193頁。

人間関係、家族における人間関係が形だけを残しつつ、形骸化した習俗とならしめな
いたためには、この事例で気付かれたように「利用者本人と介護職との信頼関係は深め
たが、家族間の信頼関係をみまもり支える支援ができなかった」ということでは、愛
情やこころのつながりといった家族機能の更なる形骸化を促しかねないのではない
か。

「介護の社会化」により生活を安定させることは、家族どうしの人間関係のつなが
りを安定させ、高齢者にとっては余生や老後としてではなく、敬われつつ過ごせる充
実期間となるという理念の実現である。しかし、現在の介護の社会化という力動的な
うねりは、こうした理念をあるべき人間観とリンクさせて社会に浸透するとは限らな
いし、逆に、家族の人間関係をばらばらにしたり、放任や放棄、高齢者に関する諸問
題を気付こうとしないし、また気付けないような家族・地域社会を再構築する可能性
も同時に秘めていると言えよう。

3. あるべき「高齢者に関する人間観」への達成方策

「自己犠牲の人間観」と「自己の利益を第一とする人間観」

ここでは、社会調査の結果などを用いて、あるべき「高齢者に関する人間観」を考
えたい。まず、佛教大学総合研究所の社会科学関係プロジェクトにおけるアンケート調査³⁰⁾にお
いて、「すべての高齢者は社会から受け入れられていると思うか」という質問に対し
て、「全くそう思わない」が7.6%、「そう思わない」が57.1%を占めた。「どちらとも
言えない」が24.7%、「そう思う」が9.2%、「強くそう思う」が1.4%であった。回答
者の属性の違いから、職業別にみると、福祉関係職員、医療関係職員、教員が「そう
思わない」という回答がいずれも60%以上である。年齢別では、「そう思う」が年齢
が10代で6%、20～30代で7%、40～50代で14%、60代以上で24%と高齢になるほど
高い。男女別では、「全くそう思わない」と「強くそう思う」がそれぞれ2～3%ず
つ男性が上回っている。こうした結果から、「高齢者が社会から受け入れられている
とみるか否か」という、社会と高齢者の関係についての見方は、年齢や職業や性差に
よって異なることを示している。高齢者に関する人間観も、こうした社会と高齢者に
対する見方が影響していることは十分に考えられる。

このように社会的な立場や環境、生得的理由などによって、社会と高齢者の関係に
ついての異なった見方が生まれる。また、こうした環境を背景として、社会的にある

30) 佛教大学総合研究所社会科学関係プロジェクト、アンケート調査『現代社会における人間
観の探究—国際化と人権の諸問題を通して—』佛教大学総合研究所、1997年。

べき姿とはどういったものなのか、という人間観を模索したい。いわば、自己のおかれた環境を媒介としながらも、人間が共通して抱く見方である。そこで、あるべき人間観への達成方策について、「自己の利益を第一とする人間観」と「自己犠牲の人間観」に分けてみてゆくこととする。

たとえば、マザー・テレサの活動を報じた新聞では、民族や国家を問わず国際的にひろく支持されたその活動は、文化や文明の形は違っても、人間として共感をもって国際的にみられていたことを強調して伝えている。これは、われわれのうちにも「自己犠牲の人間観」に通じる素質のあることを認めるからにはほかならないであろう。そして新聞では「(われわれは) お金や地位に血道をあげ、うそをつき、自分の人生は全部自分のためだけに使っていないか」³¹⁾と問いかけた。

あるべき「高齢者に関する人間観」の考察は、高齢者と社会の緊張の関係と共存の関係に迫り、自己利益と自己犠牲の両立を考えることと定義する。そこで高齢者がなに困っているのか、高齢者のなにをうばっているのか、整理してみていく。

④高齢者の発達課題からみた「あるべき人間観」

老年期は「自己の人生を完結させるという発達課題に直面させられ、その達成に苦慮する」³²⁾という時期であるとの指摘は、人類に共通した課題ともいえる。先の通り、平均寿命の延びは、老後や余生と呼ばれる年月、時間を増加させた。この延びた時間をどう過ごすかということである。単に時間をつぶすということではなく、「自己の人生を完結させる」という発達課題である。しかし、高齢者の介護における老人との関わり方や、「老人の特性・対象者理解」として紹介されている文献では、「頑固、自我が強い、独占欲、不潔、あきらめの心境、過度の気づかい、人生への誇り、世話好き、せっかち、人への好き嫌いの2面性」³³⁾といった表現である。こうした特性から、高齢者の発達課題を提案していくことは困難である。

これは、現代における切実な課題として受け止められよう。そして、高齢者層が自己完結の発達課題の達成に苦慮したあげく、自殺あるいは、痴呆症状、あるいは他のなんらかの苦境に直面する姿は、まさに現代における高齢者に関する清濁の人間観として投影される。そして、人生の勝利者・成功者、敗者という表現は、高齢者に関する人間観を一層貧弱にしているの原因の一つであろう。「自分自身が評価する自分の人生」と「他人の目によって評価される自分の人生」があり、そのことは、褒章や名

31) 毎日新聞社「社説」1997年9月14日朝刊。

32) 大原健士郎編『前掲所・鈴木浩二』新曜社、1983年、83頁。

33) 村田正子著『老人保健施設ケア・マネジメント』中央法規出版、1993年、44-45頁。

誉市民といった賞罰によっても社会的に公認されている。

生活上に勝ち負けの論理を組み込んで生まれてくる人間観は、自分以外の人間は競争相手としての存在と意識されたところに成り立つものと考えられる。したがって、友人でありライバルである、友人であり競争相手である、というアンビバレントな人間観が抱かれる。「自己の利益を第一とする人間観」はこうして存在する。

また、こうした環境において、高齢者がなにに困っているのか、どう行動すればよいのかということが、果たして考え及ぶであろうか。これについて高齢者と社会が論議を尽くすこと、そこに「自己犠牲の人間観」への道が拓けるのではないか。

②高齢者がなにに困り、高齢者のなにを奪っているのか

高齢者がなにに困っているかを知ることと記したが、生活のすべての事象について触れられるのが妥当であることから、具体的に社会福祉に関連したものとして、いくつか分類してまとめることとした。それは、経済、就労、教育、保健医療（岡村の分類）などである。社会福祉の施策が高齢者の生活を支える上での施策を法的根拠をもって実践されてきた歴史的事実を踏まえたうえで論じられることは、将来は、社会福祉という言葉が意味を忘れられるまでにノーマライゼーションの思想がすすむのであろうかということである。つまり、生まれた時から、その生まれた環境の違いは、生得的あるいは環境獲得的な能力の違いにしり、すべての社会的差別となんらかの関連をしているとも考えられる。現代の高齢者の抱える社会的不利、能力障害、機能障害をみておきたい。

老化などに伴う賃賃の立ち退きや定年退職を迫られるなどの社会的不利や、高齢に原因した障害により外出が困難になるなどの能力障害、疾病に伴う機能障害などの一連は、高齢者がなにに困っているかを感じない、また無関心に気づこうともしない社会における人間観が一因している。

高齢者に対する虐待問題、就職差別の問題、高齢者への差別・偏見の問題、医療費の自己負担割合の増加、年金の締めつけ、定年制以後の給与の低下などその事実には枚挙に暇がない。

それは、高齢者間の男女、年齢、貧富、経歴などの違いから、高齢者層のなかにも、同じように齢を重ねた者どうしであるが、相手が自分より上か下かといった人間の見方、同胞でありながら競争相手でもあるというアンビバレントな人間観があるものと思われる。高齢者がなにに困っているかを感じない、気づこうとしない社会という命題は、高齢者自身のアンビバレントな人間観にも原因があることを指摘しておきたい。そして高齢者に関する人間観を整理するうえでも一層複雑にしているのでは

る。

③社会福祉関係教育の役割

福祉士養成教育に携わる立場から、あるべき「高齢者に関する人間観」を達成する方策は、福祉士教育にどう取り組むかということであると思われる。「あるべき人間観」の達成方策について、教育の力に待つこととして考える。「歩きながら考える」「考えながら歩く」と表現されるように、施設・地域などにおける社会福祉「実践」と、歴史、理論や方法の「研究」の両方の相互作用が重視される。

福祉国家から福祉社会への転換は、まさに「われわれがどういった教育を受け、どういった教育を行うか」という人間観への働きかけからなされなくてはならない。そして日本型福祉社会は、「家族、地域社会、企業、等が保有する福祉資源に着目して、公的責任のみではなく私的責任も重視し、両者のバランスをとろうとするもの」³⁴⁾であり、人間観に関してみると、私的責任の明確化により、公的責任に「おまかせの高齢者観」から、学習することで「自らにひきつけて熟考する高齢者観」への転換を促すことが望まれる。

これについて、「高齢者がなにに困っているか気づけない、気づかない、気づこうとしない社会について」や「高齢者の発達課題について」、事例研究などから、あるべき「高齢者に関する人間観」の問題と課題を捉え直さなくてはならない。

福祉士は、利用者やその家族と関わりながら、彼らの暮らす地域、社会において福祉関係職として活動する。この活動において、利用者と援助者の援助関係からうまれる人間相互の葛藤と自己犠牲が、あるべき「高齢者に関する人間観」の達成方策にとって重要と考える。

福祉士養成における社会福祉関連教育は、あるべき「高齢者に関する人間観」につなげるべく、どういった専門教育を行っているのか。ここでは、全国の介護福祉士養成施設の社会福祉関係教科の教員に対して行った「介護福祉士養成教育の在り方に関する研究」³⁵⁾におけるアンケート調査を参考としたい。

「社会福祉関連科目の講義での教授ポイント」について、社会福祉の実践（58名）、社会福祉の思想（40名）、社会福祉の政策・行政（39名）、社会福祉の理論（34名）、社会福祉の技術（28名）、社会福祉の哲学（26名）、社会福祉の法律（20名）であった。そして「社会福祉関連の講義で難しいと思われる科目」は、社会福祉援助技術（46名）、

34) 松村直道著『地域福祉政策と老後生活』勁草書房、1990年、6頁。

35) 介護福祉士養成教育研究会・アンケート調査結果『介護福祉科における「学びやすく、教えやすい社会福祉テキスト」調査』介護福祉士養成教育のあり方に関する共同研究、1997年

社会福祉概論（37名）、社会保障論（30名）、老人福祉論（5名）などであった。（全で121名中。複数回答可の設問）

こうした結果から、介護福祉士養成教育施設における社会福祉教育は、実践を重視し、思想を重視して行われている。そして、実践と関連した援助技術、思想の基盤となる概論が、講義を行うのにおいて難しいと感じているとの回答である。

老人福祉論の講義は121名中5名が教えるのが難しいと回答している。全体からみると低い数値である。しかし、老人福祉法の理念の実現には、社会福祉関係の「実践と思想」の講義が欠かせない。そして福祉士の学習の達成は、養成施設の教員に責任の一端がある。

また、学生だけでなく、生徒や社会人、利用者とその家族なども、義務教育、高等教育、専門教育、大学教育、生涯教育などの機会において、「思想と実践」が学べるのが、あるべき「高齢者に関する人間観」を社会的に導くうえで大切であると思われる。

そうした、「思想と実践」を学べるシステムが必要である。社会福祉に関係する教育や実践の現場において、利用者と援助者が葛藤と自己犠牲を繰り返す。そうした日々の積み重ねを記録し、事例研究を詳細にすすめることが、あるべき「高齢者に関する人間観」に具体的に携われる達成方策の一つであろう。

例えば、介護福祉士が家族とのスタンスをどうとるのかということである。あるべき「高齢者に関する人間観」を援助者がどう抱いているかが問われる。介護実践などの場における家族や地域との関わりを通して、福祉士が、どのように啓蒙していくのかということである。これが課題であると思われる。

高齢者の介護に関連した人間観のあるべき姿について、介護の専門職が、「ノーマライゼーション、インテグレーション、利用者主体と参加といった考え方や実践」について積極的に働きかけようとする、そして、利用者が直面している生活上の緊張に介入することでしか、緊張と共存の啓蒙はすすめられないのではなかろうか。

むすびに

高齢者に関する「現代社会における人間観の探究」というテーマから想定されることは、2000年以後の高齢社会に向かって、どういう高齢者観をもっていくのかということであった。そして、この2000年から約80年ほど続くと推計される高齢社会は、高齢者にとって受難の社会となる可能性を否定できない。

「個人として尊重されたい」という要求は、高齢者に限った欲求ではない。子どもから大人まで、すべての人間に共通する欲求である。この意識は、社会の平和と平等がもたらした個の尊重への欲求である。大人だけ、男性だけ、権力者だけ、また一部の民族だけが、「誇りをもち」、「人として尊重される」といった人間観はもはや許されない。

しかし、例えば、「裕福」イコール「社会的地位」イコール「偉い人」イコール「人として尊重される」といった短絡的な人間の見方が、人間観の現状ではないか。こうした現実環境のもとに、特に、福祉の利用者としての「社会サービスを頼りとしている高齢者層」も共に生活しているという点を忘れてはならない。

現在のままの人間観を拡大再生することは、高齢者をはじめ障害者など社会的に弱い立場におかれた人々にとって、まさに「虐待の世紀」ともなりかねない危険性を秘めているものと思われる。

「個人として尊重されたい」という要求は、自らが社会的に大事に扱われたいという欲求であることを考えると、人間としてごく自然な気持ちであろう。しかし、その実現のためにはどういう「考えと手段」を用いるのかという点では分かれるのである。一方は、金や地位をたくさん獲得する競争に勝利することが、自己の誇りを実現するという考え方である。個人の権威を高め、そのことでまわりから大事に扱わせようという考え方と通じる。また、一方は、人間の尊厳という概念をもって、人間として生まれたからにはそのことだけで、人間同士互いに尊重し誇りを認め合おうとする考え方である。これは、生存競争に負けない努力を惜しまないという気持ちと、自己の存在欲を「八分目位」に控えるという「自己抑制・自己犠牲」の気持ちをあわせもつことであろう。

現代日本における2000年代について「高齢者への虐待の世紀」となる危険性があるのではという意味は、ここに集約されているものと思われる。そして、高齢者や弱い立場の人々が、なにに困っているのか、なにを差別と感じているのか、ということに気付かないこと、気付こうとしないし、また気付けない社会へとますます進行していると思われる。あるべき「高齢者に関する人間観」の方策は、こうしたことに気づける日本の生活文化の根を継承することであろう。

われわれの自己の存在欲を「八分目位」に控える能力は、どういう能力か不明である。しかし、日本の生活文化のなかにも、その根は存在するはずである。だからこそわれわれ国民が、国際的な多文化的な状況に生活しながらも、対話をつくし、生活文化の根本について学習することで継承発展させなくてはならない、これが課題である

と思われる。

参考文献

- 一番ヶ瀬康子編『福祉教育資料集・シリーズ福祉教育第7巻』中央法規出版, 1993年。
- 加藤博史著『福祉的人間観の社会誌』晃洋書房, 1996年。
- 松本寿昭著『老年期の自殺に関する実証的研究』多賀出版, 1995年。
- 日本自殺予防研究会編『自殺予防と死生観』星和書店, 1979年。
- 稲村博著『自殺学』東京大学出版会, 1977年。
- 浅野仁著『高齢者福祉の実証的研究』川島書店, 1992年。
- 深谷松男『現代家族法』青林書院新社, 1983年。
- 穂永豊著『老人の心理』中央法規出版, 1978年。
- 金森久雄 伊部英男編『高齢化社会の経済学』東京大学出版会1990年。
- アブラハム・モンク／キャロル・コックス著『在宅ケアの国際比較』村川浩一・翠川純子他訳
中央法規出版, 1992年。
- ジュルト スンドシュトレム著『スウェーデンの高齢者ケア』村川浩一・山崎順子訳, 中央法規出版, 1995年。
- 村上尚三郎編『福祉教育を考える』勁草書房, 1994年。
- 小倉襄二著『老後社会保障システム論』世界思想者, 1986年。
- 新明正道, 鈴木幸壽監修『現代社会学のエッセンス改訂版』ペリかん社, 1996年。
- 鉄道弘済会編『社会福祉研究43号—人権への新しい視点—』1988年。
- 鉄道弘済会編『社会福祉研究54号—国際化時代の社会福祉—』1992年。
- 鉄道弘済会編『社会福祉研究70号—社会福祉における人権を問い直す—』1997年。
- 橋覚勝著『老年学』誠信書房, 1971年。
- 折茂肇編『新老年学』東京大学出版会, 1992年。
- 柴田博編『老年学入門』川島書店, 1993年。
- 多々良紀夫編, 二宮加鶴香訳『老人虐待』簡井書房, 1994年。
- 佛教大学総合研究所社会科学関係プロジェクト, 『現代社会における人間観の探究—国際化と人権の諸問題を通して—』アンケート調査報告書, 1997年。
- 介護福祉士養成教育研究会『介護福祉科における「学びやすく, 教えやすい社会福祉テキスト」調査』介護福祉士養成教育のあり方に関する研究アンケート調査報告書, 1997年。
- E・M・ピンクストン／N・L・リンクス著『高齢者の在宅ケア』浅野仁, 芝野松次郎監訳, ミネルヴァ書房, 1992年。